

氏名(本籍)	しらさわまゆみ 白澤麻弓(鹿児島県)
学位の種類	博士(心身障害学)
学位記番号	博甲第3043号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	心身障害学研究科
学位論文題目	日本語一手話同時通訳の評価に関する研究 —手話通訳の客観的分析および聴覚障害者の期待充足度に基づいて—
主査	筑波大学教授 学術博士 斎藤佐和
副査	筑波大学教授 博士(心身障害学) 四日市 章
副査	筑波大学教授 博士(心身障害学) 鳥山 由子
副査	筑波大学教授 教育学博士 海保博之

論文の内容の要旨

研究の目的

手話通訳の質的・量的向上のためには、手話通訳者が行っている作業内容の分析とともに、聴覚障害者の手話通訳への期待を反映する評価法の整備が必要である。本研究は、手話通訳作業の記述分析と、聴覚障害者の手話通訳に対する期待の充足度という両側面から手話通訳の評価を行い、聴覚障害者の期待に応える手話通訳の在り方を客観的指標と関連づけて検討することを目的としており、以下の3つの研究から構成されている。

- 第1研究：音声同時通訳の分析手法を参考に日本語から手話への通訳作業内容の記述分析を行い、手話通訳の特徴を客観的に記述し得る指標を抽出する。
- 第2研究：通訳の受け手となる聴覚障害者が手話通訳に対して抱いている期待の内容を調査し、期待の全体的傾向および聴覚障害者の属性による差異について明らかにする。
- 第3研究：手話通訳に対する期待充足度を測定するための尺度を構成し、これを用いて聴覚障害者の手話通訳に対する期待充足度得点を測定する。同時に期待充足度得点と手話通訳の客観的指標によって得られた評価の対応関係を明らかにする。

第1研究 手話通訳の記述分析と客観的指標の抽出

1. 方法

関東地方に在住し、通訳活動に従事している経験2年～25年の手話通訳者6名を対象に、ビデオ録画された通訳対象談話を聞いて、日本語から手話への通訳を行ってもらい、全体を収録。書き起こし資料を①訳出の量的側面、②時間的側面、③日本語から手話への変換作業、④訳出された手話表現の4側面から分析する。

2. 結果と考察

通訳事例を記述分析した結果、①訳出率はその程度によって3群に分かれたが、どの通訳者も起点談話の内容を伝えるために必要な重要語を選択的に訳出していた。②起点談話と訳出表現の間のタイムラグには個人差があり、その大きさは訳出の処理単位に対応すると考えられた。③手話への変換にあたり、訳出率が高い者ほど「圧縮・統合」が多く「省略」が少なくなる傾向があり、手話の空間モダリティを活用していること示唆された。④

通訳者の手話表現には日本手話文法を借用した表現もみられが、形態の単純なものだった。

手話通訳の評価指標としては、とくに「訳出率」「タイムラグ」「変換作業における圧縮・統合の割合」「辞書形以外の手話表現の割合」「分の区切りの明確さ」「非流暢性」などが有効であることが示唆された。

第2研究 聴覚障害者の手話通訳に対する期待

1. 予備調査 手話通訳の期待に関するインタビュー調査

1) 方法

日常的に手話通訳を利用しており、手話通訳に対する期待やニーズを明確に表現できる聴覚障害者4名および手話通訳者4名に対し、手話による自由討論によって、手話通訳への期待に関する意見を収集する。

2) 結果と考察

自由討議によって、207件の意見を抽出、手話通訳者の2名で内容の類似したものを整理して、「手話表現に関する意見(58件)」、「通訳上の技法に関する意見(53件)」など6項目、101件を得た。さらに、聴覚障害関係の研究者3名により項目の妥当性について検討し、55項目を本調査の質問項目として決定した。

2. 本調査 手話通訳の期待に関する質問紙調査

1) 方法

職場、大学等で手話通訳を日常的に使用している聴覚障害者357名に対し、予備調査に基づく質問紙を郵送。回答は「とてもよくあてはまる」から「あてはまらない」の5段階を用いた。166名より回答(46.5%)。

2) 結果と考察

全体的傾向として、「安心してみていられる」「情報に間違いやずれがない」等の項目で特に期待が高く、見ていて疲れない、安心感を与える通訳で、忠実な通訳を求めていることが示唆された。日本語への形式的な忠実さより、意味的な忠実さを保ち、必要に応じて省略や言い換えなどの柔軟な操作を行うことが求められていた。期待内容は対象者の属性によって異なり、①通訳を頻繁に用いる人ほど手話の間違いや癖のない、見ていて疲れない通訳を好む、②日本手話を日常的に使う人は日本手話による通訳を望む、③聾学校出身者は日本手話による通訳を求める傾向が強く、通常学校出身者は手話の間違いの少ない見やすい手話通訳を要望し、④一般大学経験者は、場の雰囲気も含めて忠実に伝える通訳を望むなどの特徴が明らかにされた。

第3研究 期待充足度尺度による手話通訳評価と客観的指標の関係

1. 期待充足度尺度の構成

1) 方法

手話通訳の期待に関する項目に対し、探索的因子分析(主因子法-プロマックス回転)を行い、固有値、累積寄与率、因子負荷量、因子の解釈可能性を考慮に入れて因子を抽出、得られた因子構造をもとに、因子負荷量の高い項目から順に、各因子ごとに6~7項目を期待充足度尺度項目とする。

2) 結果と考察

因子分析の結果、手話通訳に対する期待内容は、「全体的印象」「手話技術」「変換技術」「情報量・忠実さ」の4因子によって解釈できると考えられた。因子ごとに因子負荷量の高い項目を抽出し、全25項目からなる期待充足度尺度を構成することができた。

3. 手話通訳に対する期待充足度の測定

1) 方法

総合評価を加えた26項目からなる期待充足度尺度を用い、職場や大学の講義などで日常的に手話通訳を用いて

いる聴覚障害者33名に、第1研究の6つの手話通訳事例について期待充足度の評定を依頼する。

2) 結果と考察

総合評価では、回答者が一致して高い評価をつけた事例から、評価が分散する事例など幅広く存在した。総合評価の高い通訳事例の場合、下位項目への得点は聴覚障害者の期待内容にほぼ沿っていた。一方「手話技術」の評価が低いものや、逆に「手話技術」への評価は高いが、「変換技術」や「情報量・忠実さ」に関する項目で低い得点を示したものなどがあり、各通訳事例の改善への示唆が得られた。期待充足度尺度における評価得点と手話通訳作業の客観的指標との関係を検討した結果、「手話技術因子」では、手話の異なり語数の量、特に辞書形以外の語彙使用比率が聴覚障害者の期待充足度に影響を与えており、また「変換技術因子」では、付加、言い換え、圧縮・統合、原語借用の出現回数、特に下位概念へのより具体的な言い換え数や、文の関係を明示する接続詞の付加等が、期待充足度の向上に効果的であることなどが示唆された。

審査の結果の要旨

本論文は、手話通訳の評価という日本ではまだ殆ど開拓されていない分野の研究である。序論において、手話及び手話通訳に関わる現在の問題状況を整理し、音声同時通訳評価の研究法を参照しつつ、通訳の受け手である聴覚障害者の意見を重視した手話通訳独自の評価研究が必要であることを説得的に述べている。

本論は3つの研究から構成され、研究1では音声通訳の先行研究を参考に手話通訳作業の記述分析を行い、有効な客観的評価指標の抽出に成功している。研究2では聴覚障害者の手話通訳への期待を調査し、研究3では、その調査結果に基づいて因子分析の手法によって期待充足度尺度を構成し、さらにこの尺度と通訳の客観的評価指標との関係を検討している。こうした観点からの手話通訳分析は過去に殆どなく、得られた知見は先進的、独創的であり、かつ手話通訳評価、養成の現場において利用可能である点で高く評価できる。

通訳対象の談話素材が限られていることや、対象とした聴覚障害者が教育水準が比較的高い人などに限定されている点で、様々な手話通訳の一面を評価したものという限界はあるが、今後の発展が期待でき、課程博士論文としての水準は十分満たしていると評価できる。

よって、著者は博士（心身障害者）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。